学外研究支援（海外）に係る成果報告書

２０２５年　　６月　　１日

北九州市立大学　学長　様

所属・職名　　外国語学部・教授

氏　名　　鳥谷　まゆみ

２０２４年度に実施した学外研究支援（海外）について、下記のとおり成果を報告します。

［実施期間］ 2024 年 4月1日～2025 年 3月25日

［出張先］ 台湾大學

［用務内容］ 台湾において台湾大學文學院中文系に基盤をおいて、国際シンポジウムやワークショップに参加して学術交流を行う。また、研究に必要なデータの収集・整理、現地調査を行う。

［テーマ］ 20 世紀小品文の多角的研究 ――日本、中国、台湾における紙上の声にみるモダニティ

＜研究の目標と目的･方法＞

本研究では、教育・出版メディア・文学形式という複合的視座を導入し、日本と中国、台湾の近代文学形成（新文学）期に揃って出現した「小品文」を対象に調査・分析を行い、中国・台湾文学史の流れを再検討する。本研究は、大正日本で出現し流行した文章形式のひとつである「小品文」が、日本留学経験を持つ中国知識人によって中国に持ち込まれ、多様な領域で活用されたという発見を端緒としている。主に次の文字テクストを扱う：1）国文・国語教科書、2）近代教育が導入された 1920 年代から中国成立までに刊行された投稿雑誌、3）台湾の 1930 年代に展開された「話文」一致運動を背景とする文芸誌や新聞、以上である。近代日本における小品文は、出現当初、言文一致運動の最中にあって学生の習作を意味した。日本では、国語教育や投稿雑誌、文章指南書の流行によって小品文は若年層を中心に浸透し、運動の衰退とともに消滅した。いっぽう、中国では 1920 年代初頭に小品文が中国に持ち込まれて以降、日本と同様の経路で流行したが、日本とは異なり、教育、出版、文学の領域で長きにわたって活用された（鳥谷 2016）。すなわち現代日中の小品文は、日本と中国の近代文学の発展を理論面と実践面の両面から支えたのである。20 世紀、とりわけ 1930 年代以降、中国と深い関係を有し、活発な物質的、人的交流があった台湾を含めて考察を行うことにより、東アジア独自のモダニティを見出すことも可能ではないか。鳥谷の調査によれば、新文学時期の台湾においても、「話文」一致運動期に中国渡航歴がある知識人によって「小品文」が台湾に持ち込まれ実践されことが分かってきた。以上のような背景から、本研究では日中台の新文学時期の特徴について、 小品文出現以前・以後に注目して、その連続性や断絶、さらに独自性を視野に入れて読み解く。

＜成果＞

・研究活動を実施し、学会やシンポジウムに参加した。また、講演を行うなどして、研究・教育上の交流も行った。⇒学外・海外での研究基盤を構築しえた。議論を通じて、研究内容に関する新知見の獲得に繋がった。

・研究テーマに関する資料収集と整理を行った。⇒継続調査の必要性を確認することができた。本研究課題の研究フレームの妥当性、発展性の確認に繋がった。

・国家図書館や台湾大學図書館、台湾文学館で資料・現地調査を行った。⇒台湾における独自の調査方法を確立することができた。

□参加した学会･研究会･講演会

１）研究発表：「風作人與堀口大學」魯迅留学仙台 120 周年記念国際学術シンポジウム（東北大学)、2024 年 10 月 26 日

２）講演「日本周氏兄弟研究的新視野――作為史料與方法的書信（第一講）」武漢大学文学院講座「日本中国文学研究前沿：新理論、新方法與新史料」、（武漢大学）、2024 年 11 月 18 日

３）講演「日本周氏兄弟研究的新視野–作為史料與方法的図像（第二講）」武漢大学文学院講座「日本中国文学研究前沿：新理論、新方法與新史料」、（武漢大学）、2024 年 11 月 19 日

４）講演「20 世紀初期，日本報刊中的「聲音」在中國的傳播與実踐：以校報『春暉』半月刊為中心」「中国近現代報刊的探索與研究」座談会（台湾大學）、2024 年 11 月 28 日

５）講演「周作人與堀口大學：以方紀生為中介詩歌與文化的接觸」（清華大學文學院臺灣文學研究所）、2024 年 12 月 4 日
６）講演「周作人與打油詩：從日本的周作人研究新視野談起 」（台湾大學）、2024 年 12 月 5 日
７）講演「日中文學與文化的越境：以 1940 年代周作人為中心」東呉大學日本文學系校外専家講座、（東呉大學）、2024 年 12 月 11 日
８）通訳：鄭俊坤「朝向新的共同體：必要性及其意義」「東亜文學與文化」系列講座（台湾大學）、2025 年 3 月 18 日
９）講演「当代臺灣小説在日本：越境少女們掙扎與交響的多言語空間」「東亜文學與文化」系列講座（台湾大學）、2025 年 3 月 25 日
以上 9 件。

・今後の研究活動について、上述の学外研究で得られた知見や経験、人的ネットワークをもとに、研究テーマを拡張しながら研究を遂行していく予定である。現在、継続して資料収集とその整理を行いつつ、研究アプローチの妥当性についても検証を行っている。

以上